

マーク・トウェインの二面性

金谷良夫

マーク・トウェインと言えば、楽観主義、ユーモア、あるいは笑いという言葉が直ぐ連想される。しかしその一方で、特に彼の晩年には悲観主義も見い出せる。こうした彼の楽観主義および悲観主義は彼の二面性と言え、読者はトウェインのそうした特質を見るときそれがいかなるものなのか、また彼の楽観主義と悲観主義の奥義を究めたいと考える。ともあれ、彼はユーモリストとして、終生笑いを描いた。その笑いの根底には、必ず人間性が読み取れる。ウィリアム・ディーン・ハウエルズは、トウェインはセルバンテス、スウィフトなどの仲間に入るが、「人間性においては、誰も彼に匹敵する人はいなかった」と述べている。¹⁾

トウェインは楽観主義者であったのか、それとも悲観主義者であったのだろうか。彼は『自伝 第Ⅱ巻』（アルバート・B・ペイン編）において、兄のオーリオンに言及し、「悲観主義者は生まれつきで、後から作られるのではない。楽観主義者は生まれつきで、後から作られるのではない。しかし、彼は私が知るなかで悲観主義と楽観主義がまったく同じ割合で同居した唯一の人だ」と述べる。また、トウェイン自身が述べるように、「完全に悲観主義的に、あるいは完全に楽観主義的に生まれついている人はおそらく誰もおらず、その人はある線に沿っては悲観主義であり、他の線に沿っては楽観主義である。それが私の場合だ²⁾」ということである。

トウェインの場合は、その割合は微妙だが、基本的には彼を楽観主義者と捉えられるだろう。何故なら、彼は、その『自伝 第Ⅰ巻』（アルバート・B・ペイン編）で、他の人が意気阻喪しているとき、自分が明るくできるのは私の気質だった」と述べていることを含め、いくつか理由が見い出せるからである。『マーク・トウェインのノートブック』（アルバート・ペイン編）で彼は、自分自身を明るくさせる最良の方法は誰か他の人を明るくすることだ」と述べ、彼がそのようにしていたことが窺えるし、実際娘のクララによれば、トウェインは朝の食卓でジョークはあまり受けはしなかったものの常にジョークを飛ばすつもりで、皆を明るくさせようとしていた³⁾という。また、『マーク・トウェインのノートブックとジャー

ナル 第4巻』（カリフォルニア大学出版）において、1870年の書き込みとして、オリヴィアは「笑う、…私は今までの人生で彼女ほど愉快な人に会ったことがない——私自身を除いて」とある。長女のスージーは彼女の「自伝」でトウェインは「たいへんよい人でとてもおもしろい人だ」と書いている。デクソン・ウェクターによれば、トウェインが母親について、彼女は「太陽のような資質を持っており、…彼女の長い人生は彼女にとって、あらかた祭日だったし、悪意のない冗談やウィットにまつわるふざけた遣り合いを好んだ⁴⁾」と述べたと記している。トウェインは母親のそうした気質を受け継いだに違いない。そして、1899年4月2日トウェインはハウエルズに人間が尊敬できなくなったし、新聞を見れば、人間の墮落、卑劣、偽善、残酷さが文明を作っているが、それでも「自分は絶望しない」と彼に述べさせることは悲観主義者ではできない。彼の晩年の作品『人間とは何か？』（1910）における中心的存在の「老人」は、「人間は機械である」という考え方、すなわち決定論を主張し、その哲学は極めて暗いにもかかわらず、彼は絶望しておらず、彼自身も暗くない。また、やはりその『自伝 第II巻』のなかに、ヘレン・ケラーとのエピソードがあり、そこでヘレン・ケラーはトウェインについて、「トウェインさん、あなたは一度私に自分は悲観主義者だとおっしゃいましたが、偉大なる人はよく間違っ^て受け取られます。あなたは楽観主義者です」と述べたことも主張できる。また、トウェイン自身「人の気質は生まれつきのもので、いかなる環境をもそれを変えることはできない。私の気質は自分の精神を一時^{いっとき}に長い間気落したままにはおかない」と述べる。

しかし、トウェインが「私の人生の転換点」（1910）で示すように、人間の気質は「環境の仲間」であるが、「環境は人間の主人だ——そして環境が命令すれば人間は服従しなければならない…環境は強力だ」と言える。したがって、環境も人の姿勢を大きく左右する。その意味で、彼を取り巻く環境が彼を楽観主義者としての資質を持続させたと言うことができ、その環境を作った人として妻のオリヴィアが大きな役割を果たしたと言っても言い過ぎではないだろう。

『マーク・トウェインの書簡集 第4巻』（カリフォルニア大学出版）において、トウェインはオリヴィアに対して、おどけて息子ラングドンに成り代わり「ぼくのちっちゃなおかあさんはとても明るく、朗らかで、とても楽しそうだけど、なぜなのだろう。病気のときでも、いっぱい笑うの」と手紙で書いている。⁵⁾

『自伝 II 卷』において、トウェインは「彼女はいつも明るかったし、いつもほかの人に対して彼女の陽気さを外に表すことができた。九年間、私たちは貧しく、借金をしていたとき、彼女はいつも私が絶望しないようにすることができ、暗雲に対して明るい面を見ることができたし、それで明るい面が見られたのである。…いつも少女の未練のない笑いを持っていた。なかなかそういうことはなかったが、彼女が笑ったときは耳に音楽のように奮い立せるのだった」と記している。彼女の笑いがいかにトウェインにとって、快いものだったか想像できる。こうして見るとオリヴィアから、トウェインの短編「百万ポンド銀行券」(1893)のポーシャが連想される。ポーシャは主人公のヘンリーの窮地を「笑いこぼるほど」笑い、ヘンリーには、人のもめごとや悩みや恐怖の話がそうした効果を齎すことがわからなかったが、彼女はそれを笑い飛ばしたのだ。それでヘンリーは「そんなに陽気になれる彼女を見て、ますます好きになってしまう」のである。これはオリヴィアとポーシャが重なって見える例だ。

「一世紀以上もの間、批評家はサミュエル・クレメンズ [マーク・トウェイン] の妻オリヴィア・クレメンズが、病気がちで、依存的で、有名な19世紀の作家の作品を抑制した無気力な女性でしかない」と描写されてきた⁶⁾が、『マーク・トウェインの書簡集 第4巻』編者の一人、リン・サラモによれば、「オリヴィアは、彼 [トウェイン] の作品の検閲官でユーモアがなく、消極的で、病気がちな、澄ました人間と見られていた。しかし、それは単に本当ではなかった」と述べ、間違った彼女のイメージを指摘している。別の編者ヴィクター・フィッシャーは、「彼の妻と子供の病弱なことが長引きはしたが、それでもなおクレメンズが——結婚前は自称「放浪者」——であり、家族を持つ男として『ひどく興奮するほど幸せ』だった」と述べ、彼がいかに楽しい生活を彼女と共に送っていたかが窺える。さらに、別の編者のマイケル・フランクは「初めて…われわれは彼ら [トウェインとオリヴィア] が本当の協調関係のなかで相互に依存していたと言う感じをつかんだ」と述べる。相対的にみれば、そうした環境のなかでトウェインには楽観主義の要素が比重を占めていたのではないか。要は人が明るいか暗いかを判断するのはどちらの割合が大きいかによるのだ。

一方、無論トウェインは比較的早い時期から悲観主義的側面を持っていたと考えられる。彼の「『人間とは何か?』の決定論および人類についての言説という

一般的な悲観主義は少年時代に反復して教え込まれたカルヴィニズムの産物であると一般に考えられている」とハワード・マンフォード・ジョーンズは述べる。⁷⁾ トウェインの『マーク・トウェインの自伝』（チャールズ・ネイダー編）によると、トウェインが20歳の時、シンシナッティで、40歳のスコットランド人のマクファーレーンという自称「哲学者」に出会い、彼の「人間の心は動物王国で唯一悪いものである」という考え方に共鳴したことが窺え、それが後のトウェインに大きな影響を与えたと見て間違いないだろう。次女クララは、父親のトウェインの心的状態について、「闇から光りへ、そして光りから闇へとの変化は激しかったがそれが多分父親の魅力だった⁸⁾」と述べている。また、彼女は「疑いなく後の父親の根深い悲観主義はスージーの悲劇に端を発した。それは、彼自身の悲しみだけでなく、母親の悲しみに沈んだ光景をみるに堪えなければならなかったからだ」と父親の悲観主義が増大した点を指摘している。デランシー・ファークソンは「暗い心的状態は、彼の性格の一部であったし、彼が陽気だったことに対して払った代償の一部であった⁹⁾」と述べる。当時のアメリカの男性はダークスーツを着ていたにもかかわらず、白色を好んだ訳でもないトウェインは晩年白いスーツを着たが、これは彼の悲観主義の表われと捉えることができる。それは晩年のトウェインにとって、世の中は最早きれいには見えなかったのである。こうした悲観的な見方が彼のなかで比重を占めていたため、白い服を着続ければ「汚い世界においてきれいで¹⁰⁾」いられると考えたのである。

『マーク・トウェインのノートブック』のなかで、1902年にトウェインは楽観主義と悲観主義に関して非常に興味深い言葉、すなわち「48歳前に悲観主義者になる人は知り過ぎているが、もしその後でもその人が楽観主義なら知らなすぎる人だ」と記している。これは何をあらわしているか。トウェインが48歳といえ、1883年である。ウォルター・ブレアーによれば、トウェインは『ハックルベリ・フィン』を仕上げた2、3ヶ月後に決定論を意味する悲観主義者になったと暗示すると述べている。¹¹⁾ その意味から言えば、その作品にはかなりの含蓄がある。確かに、例えばその作品には作者の複雑な意図やさまざまな笑いが含まれる。あるいは、『ハックルベリ・フィン』以降の作品は確かに暗さを増していると言える。彼の二面性を見る場合、48歳を一つの転換期と考えてよいだろう。しかし、それ以前の作品にもトウェインの悲観主義の片鱗が読み取れる。『トム・ソーヤー』

が適例だ。この作品は少年・少女の物語と見なされ、その明るい面が強調されがちだが、詳しく作品を見てみると、実際明暗併せ持つ小説であることが読み取れる。トウェインは一般にユーモリストと捉えられる一方、シリアスな作家でもあった。彼のユーモアや笑いの背後に深刻な問題が潜んでいる場合が多いからだ。シリアスなトウェインを見れば、彼の悲観主義が色濃く含蓄されていることが分かる。

しかしながら、トウェインは自分が好むと好まぬとにかかわらず人を笑わすおもしろい作品を描くしかなかったと言えるし、あるいはそう運命づけられていたと言ってもよい。それは、例えば、『マーク・トウェインの書簡集 第1巻』（カリフォルニア大学出版）において、彼が1865年10月に兄夫婦に宛てた手紙で示すように、彼の文壇へのデビュー作、フロンティアの短編「飛び蛙」（1865）がセンセーションを巻き起こしたのは、文学への「神のお召し」があったからである。しかし、それは、当時「価値が低い」ユーモア文学からのものであった、と彼は心情を吐露する。したがって、トウェインは皮肉にも、「神の創造した人間の笑いを引き起こすために書く」ことに専念することがよいと考えたのである。それ以来彼は、「若きサタンの物語」（1982）でサタンの口を通して、笑いは人間の「有効な武器」だと言うまで、笑いを念頭に置いて作品を書き上げたと言えることができる。また別の例を引けば、彼が、『トム・ソーヤー』を出版した1876年、グロテスクとも言える誇張したユーモアを描いた短編「コネティカットにおける最近の罪の謝肉祭」を『アトランティック誌』に掲載したが、この時の一般読者のトウェインに対する反応は「モラリストになり、社会的価値観を吟味し、増大する彼の分裂感に軽く言及した彼の月の暗い側面¹²⁾を探究するトウェイン」に当惑し、満足しなかったと、ジャスティン・キャプランは『クレメンズ氏とマーク・トウェイン』において述べている。つまり彼らは、「依然としてマーク・トウェインに、おもしろい人だけであって欲しいと思った¹³⁾」というのである。この短編は、確かにそれまで彼が描いた作品とは趣を異にしており、そこで彼はブラックユーモアを描出したと捉えられる。簡単にその筋を言うと、第一人称語り手「私」が、自分の分身である醜く、グロテスクで、不気味な笑いを有する「良心¹⁴⁾」という小人を焼き殺してしまい、その後2週間で38人を殺し、自分の視界を遮る家は焼き払い、さまざまな罪を犯し、いろいろな放浪者を科学的目的で利用する、

というように豹変してしまうという暗い話である。こうした彼の暗い笑いに当時の読者は違和感を覚えたのだ。これは作家が一旦定着したイメージを払拭することが簡単にはできないこと、また一般読者はそうした変化を望まない一つの例である。

このように人を笑わす運命にあったトウェインは、時にはそのジョークの度が過ぎて大きな失敗を犯すことがあった。その代表的な例として、まず彼が1862年に人を一杯喰わす小品「カーソン近くの血に染まった大虐殺」を書きヴァージニア・シティの『エンタープライズ紙』のジョー・グッドマンに気に入られ発表するものの、サンフランシスコの新聞社から彼のジョークは「見当違い」で「不条理」だと酷評され、彼らに不信感を持たれてしまう。それに対してトウェインは謝罪の手紙を出し、『エンタープライズ紙』も辞めようとするがジョー・グッドマンに引き止められたことがあった¹⁵⁾。そしてその15年後に、ジョン・グリーンリーフ・ウィティアーの晩餐会でのトウェインの失敗は同様にその典型例である。1877年12月17日に『月刊アトランティック誌』の主催でジョン・グリーンリーフ・ウィティアーの70歳の誕生日および雑誌創刊20周年記念を祝う晩餐会が開かれ、そこにラルフ・ワルドー・エマソン、ヘンリー・ワッツワース・ロングフェロー、オリヴィア・ウエンデル・ホームズ、ウィリアム・デーソン・ハウエルズを含め、文壇における錚々たる人物が招待され、トウェインも呼ばれスピーチをすることになった。彼は十分準備をしてスピーチに臨んだ。トウェインはそこに不敬をあらわす話を盛り込んだが、それとお上品な伝統とは相容れなかったのである。トウェインいわく、「誰か笑うだろう、若しくは誰か微笑むだろうと期待したが、その望みがだんだんなくなり誰もそうはしなかった」（『マーン・トウェインスピーチ集』）のである。結局、それがエマソン、ロングフェロー、ホームズを趣味の悪い下品なジョークで揶揄したと取られ響燈を買ってしまい、詫げる手紙を彼らに書いた事実は有名である。それがトウェインにより「奇妙な出来事」として後々まで残った。ヘンリー・ナッシュ・スミスはトウェインが「お上品な伝統を攻撃したヒーローとして後の世代が使うに便利な過去を組み入れ、また彼がしただろうことに対して懲らしめられることは避けられないことだった¹⁶⁾」と述べる。1877年12月28日頃にトウェインはこのとき失敗を招いた自分について、ハウエルズ宛てに「私は大いなる、そして途方もない愚者だ。でもそれなら私は神の愚者

であり、神の創造物は尽く尊敬をして熟慮されねばならない」と書き、自分の愚かさだけでなく、人間としての不完全さや弱さを暗示する。ときに、当時の新聞は彼らが「マーク・トウェインという強い味付けのネヴァダのアルコール中毒による振顛譫妄」を聞いたと酷評した。トウェインを支持した新聞もあるにはあったが、大半は彼を批判するものだった。これらはトウェインのユーモアや笑いが的を外れたときに生じたのである。ハウエルズによると、チャールズ・ダッドレー・ウォーナーはトウェインを「やあ、マーク、君はおかしな奴だ」と言ったという¹⁷⁾。さらに、トウェインは、ウォールト・ウィットマンの70歳の誕生日を祝う手紙を出す¹⁸⁾が、これも失敗例である。こうした例は、いずれもトウェインがジョークの度が過ぎて生じた失敗であり、同時に彼の不敬に基づく考え方を示す。

トウェインは、『マーク・トウェインのノートブックとジャーナル』（カリフォルニア大学出版）において不敬について、「それが一つの目的に適ったものにつきり笑いを浴びせれば、それは一千もの冷酷で忌まわしい見せかけと迷信を滅亡させるし、それで精算ができる。不敬は自由の保護者であり、その唯一の確かなる防御手段である」と述べる。しかし、やはり人が置かれる環境によってそれは必ずしも受け入れられない。

ところで、トウェインは基本的に物事を系統的に考える人間ではなかったと言えよう。例えば、トウェイン自身、自分は「おもしろい人」と言われても構わないと言ったが、別なときには、そう捉えられては困るとも言っている。また、無論経済的な問題を鑑みたとしても、後に妻となったオリヴィアに講演は非常に嫌いなので止めると言っては続けたり、旅は最早魅力がなくなったと言っては続けた（一説によると彼はヨーロッパに29回渡ったとされているので、嫌いだったとは言い難い）。あるいは、酒を止めると言っては続けていた。こうしたところにも彼の二面性は見られる。彼自身のなかにも、自分の本名のサミュエル・クレメンズと筆名のマーク・トウェインとが同居しており、作品を読むときは、十分注意して読まない重要なポイントを外してしまうことがあると批評家がしばしば指摘するが、確かに彼の「二面性をマーク」しなければならない。

しかのみならず、彼にはスピーチや作品に関しても優柔不断なところが多く散見される。二つ例をあげよう。トウェインは、ウィティアーの晩餐会のスピーチをした翌年の2月5日にフェアバンクスに「そのスピーチをよいものでないと

誰も言わなかったと私は確信しているし、結構私の平均以上だ」と書いた。そのときから28年後の1906年1月11日にそのスピーチを二度再読し、それは「粗悪でも下品でもない」と否定したが、同年1月23日に親友のトウィッチェルに対しその見方を変え、あれは「粗悪で下品だった」と言い、「スピーチは最初から最後まで気に入っていない」と述べた。しかし、1907年5月25日にそのスピーチを音読して読み直し、今度はそのスピーチが見事だというように見方を二転、三転させている。¹⁹⁾次に、『トム・ソーヤー』に関して、彼は最初、「少年の小説ではまったくない。大人だけに読まれるだろう。大人のために書いたのです」と親友の作家ウィリアム・ディーン・ハウエルズに1875年5月5日付の手紙で明言したが、数ヶ月後の11月25日付のハウエルズからの手紙で、「それは少年の物語として明確に扱った方がよいと思う」と言われ彼に同意し、最終的に「私の本は主に少年および少女の楽しみに向けられたけれど、だからといって大人に避けて欲しくないと思う」と『トム・ソーヤー』の冒頭で書いている。こうした例は、トウェインの他の人への依存心に由来するものと考えられる。

トウェインには、絶えず彼を訓練してくれる指導者がいた。両親、オーリオン、ホレイス・ビックスビー、マックファーレン、ジョー・グッドマン、ダン・デ・クウィレ、アーテマス・ウォード、ブレット・ハーテ、ジム・ギリス、ステーブ・ギリス、メアリー・フェアバンクス、オリヴィア、ウィリアム・ディーン・ハウエルズ、²⁰⁾ヘンリー・ロジャーズ、ジョー・トウィッチェル——こうした人たちは少なからず彼に影響を与えており、また同時にトウェインは彼らに頼っていることが分かる。例えば彼は、十歳年下の妻オリヴィアに頼り、作品を書く際目を通してもらい、七歳しか変わらないフェアバンクスを「フェアバンクスお母さん」と呼び、彼女から躰を受けたし、あるいは僅かに年長のハウエルズに対し、1875年7月25日付の手紙で「あなたは私の作家だ。私はあなたに制限されているが、他の人なんかどうだっていい」と書いており、作家としてハウエルズに頼っていたことが窺える。別の見方をすれば、トウェインは付和雷同をしたのではなく、彼がいた環境における一定の人々、つまり信頼できる相談相手の意見を無視できず、それを聞きつつよりよい作品を描いたということができ、その意味で彼らの意見は貴重だったと言える。

ユーモリストのトウェインは終生笑いを描く運命にあったと前述したが、確か

に彼の作品を読むときさまざまな笑いが発見できる。バーナード・デヴォートは「現実の世界で見聞きしたものを示すことによって、笑いを引き起こすのがマーク・トゥェインの願望だった²¹⁾」と述べる。そして、笑いがトゥェインの「武器」になり、その笑いの特徴が人間性に根ざしているということである。『憤激するマーク・トゥェイン』において彼は、「人間は常におもしろかったし、われわれは人間が引き続き変化することはないということをその過去により知っている…それは常に同じであり、変化することは全くない」し、「われわれは内面的にみな同じだ」と述べるように、人間について常に興味を持ち、そして人間を気にせずにはいられなかったため、おそらく一方で人間を愛し他方で人間を嫌うという反対感情の併存があったであろう。しかし、彼は人間を見放さず、最後まで人間性について探究したとすることができる。その探究の結果が人間性にまつわる笑いといってよい。重要なことは、トゥェインは頭でなく、心で作品を書いたということだ。彼は1868年に、「文学では常に『正直は最良の策』だ。心で書く人はよく書けないということは決してないが、…心のないものを書いた人でよく書けた人は誰もいなかった」と『マーク・トゥェインの書簡収集 第2巻』（カリフォルニア大学出版）で述べており、われわれは彼がいかに心で作品を描いていたかを垣間見ることができる。さらに、『憤激せるマーク・トゥェイン』において、トゥェインは「かなり前から経験によって教えられており、もし私が少年の物語あるいは誰か他のものを語るとして、それが心ではなく、頭に由来するとすれば、それは出版には値しないし、常にくずかご行きだ」と述べる。トゥェインが作品を心で書いたからこそ今もって人々はトゥェインの味のある作品を読み続けるのである。

注記

- 1) William Dean Howells, *My Mark Twain: Reminiscence and Criticism* (New York: Harper & brothers, 1910) 13.
- 2) Edward Wagenchneft, *Mark Twain: The Man and His Work* (New Haven: Yale University Press, 1935) 223.
- 3) Clara Clemens, *My Father Mark Twain* (New York: Harper & Brothers, 1931) 3.
- 4) Dixon Wector, *Sam Clemens of Hannibal* (Boston: Houghton Mifflin, 1952), 126.
- 5) アメリカでは今でも親が赤ん坊に成り代わり手紙を書くことがある。
- 6) Gretchen Kell, "Berkleyan" (Berkeley: November 29–December 5, 1995).
- 7) Howard Mumford Jones, "The Pessimism of Mark Twain," ed. Dean Morgan Schmitter, *Mark Twain: A Collection of Criticism* (New York: McGraw-Hill, 1974) 43.
- 8) Clara Clemens, 60.
- 9) Delancy Ferguson, *Mark Twain: Man and Legend* (New York: The Bobbs-Merrill, 1943) 183.
- 10) Justin Kaplan, *Mr. Clemens and Mark Twain* (New York: Simon and Shuster, 1966) 183. 一方、ハウエルズ夫人に白い服を着れば背が高く見えると勧められ、トウェインがそれを受け入れた事実も残っている。
- 11) Walter Blair, *Mark Twain and Huck Finn* (Berkeley: The University of California Press, 1960) Preface.
- 12) 『マーク・トウェインのノートブック』のなかで、トウェインは1897年の書き込みとして「人は皆月であり、誰にも決して見せない暗い面がある」と記している。
- 13) Justin Kaplan, 194.
- 14) マーク・トウェインにとり、良心は「人間のモラルの薬箱」（『自伝 第II巻』）であり、永遠のテーマで、かつ深刻な問題であった。そのため彼は、夜時には狂気を覚えたという。また、彼は1869年3月2日にオリヴィアに手紙で、「良心に悩まされた」と書いている。『トム・ソーヤー』においても

『ハック・フィン』においても、主人公は良心の呵責に苛まれる。また、後の作品では良心が「モラルセンス」に変わる。

- 15) Paul Fatout, *Mark Twain in Virginia City* (Bloomington: The Indiana University Press, 1964) 104-105.
- 16) Henry Nash Smith, "That Hideous Mistake of Poor Clemens's," "Harvard Library Bulletin" (Cambridge: Harvard University, 1955) 175. Edward Wagenknacht, *Mark Twain: The Man and His Work* (New Haven: The Yale University Press, 1935) 65. 参照。
- 17) William Dean Howells, 61.
- 18) Edward Wagenknacht, 127.
- 19) Henry Nash Smith, 175.
- 20) *Ibid.*, 169. Dixon Wecter, *Mark Twain to Mary Fairbanks* (San Marino: Huntington Library, 1949) 183. によると、トウェインはあなたとオリヴィアが私の最も厳しい批評家だと手紙で書いている。因みに、「クエーカー号」で旅をした際、フェアバンクスは笑いを大いに気に入り、トウェインが座ったテーブルが最も頻繁に笑いが起こったという。(120)
- 21) Bernard De Voto, *Mark Twain's America* (Boston: Little, Brown, 1932) 243.